

2023年1月15日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 61 : 1

ローマの信徒への手紙 8 : 14～17

「独り子、我らの主」

(ハイデルベルク信仰問答 問 33～34) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 ヨハネによる福音書 3 : 16

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 61 : 1、ローマの信徒への手紙 8 : 14～17

【説教】 「独り子、我らの主」

<神の子>

先ほど読まれたローマの信徒への手紙には「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです。」とありました。

イエスさまが救い主であることを信じ、洗礼を受けた者は、イエスさまと一つに結ばれて、霊を受けて、「神の子」と呼ばれるようになります。神の子。あの、天地を造られた方の子。命を創造し支配される方の子。万物を支配なさる方の子。そう呼ばれるのです。

ですから、わたしたちは祈る時、この全能の、天地万物の創造主を、「天の父なる神さま」と、子どもが大好きな父親を慕って話しかけるように、実に親しげに呼びかけます。そして父なる神さまは、いつも共にいて、わたしたちに語りかけ、耳を傾け、その御手で守り導いて下さるのです。

天の父なる神さまは、はるか彼方の高みにおられて、わたしたちが努力して、修行をして、自分を高めて、やっとお会いできるお方なのではありません。

いや、実は本来、神とは確かに、そのようなお方でした。神は神であり、わたしたち人間は造られたもの、被造物です。そこには圧倒的な、絶対的な、超えることのできない壁、果てしない隔りがあるのです。

しかし、まるでその隔りがないかのように、わたしたちは、天の父なる神さまに親しく「わたしの父よ」と呼びかけることができる。心からの信頼を置いて、なんでも打ち明け、なんでも頼り、なんでも求めることができる。

それが、わたしたちが「神の子」である、ということなのです。

しかしまた、わたしたちは、わたしたちを救うためにこの世に来られた「イエスさま」というお方が、たったお独りの神の御子である、ということを知り、告白しています。

教会が代々受け継ぎ、告白してきた「使徒信条」では、「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず」という一文があります。

今日、共に聞く『ハイデルベルク信仰問答』の間 33～34 では、このように、救われたわたしたちが「神の子」と呼ばれていることと、イエス・キリストが「神の独り子」と呼ばれていることの、違いと意味を語ります。

そして、そのゆえにわたしたちは、この神の独り子が、「我らの主」、わたしたちの主人、と告白すべき方であることを、教えられるのです。

<この方のおかげで>

さて、今日の間 33 は、このような問答です。

問 33 わたしたちも神の子であるのに、なぜこの方は神の「独り子」と呼ばれるのですか。

答 なぜなら、キリストだけが永遠から本来の神の御子だからです。わたしたちはこの方のおかげで、恵みによって神の子とされているのです。

まず、本来の、生まれながらの神の御子は、イエスさまただお独りです。イエス・キリストだけが、永遠から本来の神の御子であり、まことの神であります。

一方わたしたちは、神に造られ、命を与えられた人間、被造物です。しかも創造主である神さまに背き、神さまの御許から離れて生きようとする、悲惨な罪人でしかありません。

本来「神の子」と呼ばれるにふさわしいのは、イエスさまただお一人だけです。

しかし、今日の答えにあるように、「わたしたちはこの方のおかげで、恵みによって神の子とされて」います。この方のおかげで。イエスさまのおかげで。イエスさまが救い主となり、わたしたちのために十字架に架かって死に、復活なされたのおかげで。被造物であり、罪人であったわたしたちは、罪を赦され、新しい命を与えられ、「神の子」とされたのです。

これは、ただ恵みによるものです。わたしたちが「神の子」とされたのは、わたしたちが善い行いをしたり、徳を積んだりして、神に近づいたからではないし、何かを悟って、神と人間との隔たりを乗り越えたからでもありません。

わたしたちは、罪に捕らわれ、神さまに従うことが出来ず、自分を救うために何をするともできない者です。神さまがわたしたちに求めておられる、神を愛すること、隣人を自分のように愛すること。わたしたちは、これを、どうしても行うことができません。神さま以外の力に頼ります。また、自分が愛したい者だけを愛し、愛を必要としている者を愛しません。自分の敵を愛すること、赦すことは、もっともっと出来ません。

わたしたちは、神さまの御心に従うことができません。それが罪です。わたしたちは、自分ではどうすることも出来ない罪に支配され、悲惨の中に捕らわれているのです。

そのような、罪の中に捕らわれているわたしたちが、隔たりを乗り越えて、壁を打ち破って、自力で天に昇り、神さまに近づくことはできません。

しかし、わたしたちは、神の御子イエスさまのおかげで、罪を赦していただくことができる。イエスさまのおかげで、神さまに近づくことができるようになったのです。

それは、どのようにしてかという。神の御子の方が、隔たりを超えて、わたしたちのところへ、罪の只中へ、低く降ってきて下さることによって、です。

神の御子の方が、神の身分を捨てて、栄光を捨てて、御力を捨てて。まことの人となり、貧しくなり、小さくなって、わたしたちのところに来て下さった。隔たりを越えて下さったのは、イエスさまの方でした。

わたしたちからは超えられない壁を、イエスさまの方から来て下さって、わたしたちが神さまの御許に行くことができるように、道を用意して下さいました。

<我らの主>

そして、この世に来られた神の独り子イエスさまは、ご自分の命を代価として、ご自分の尊い血によって、わたしたちを罪から、悪魔のすべての力から解放し、わたしたちを買い取って下さいました。

そうして、わたしたちは神の御子イエスさまのものとされたのです。イエスさまが、罪に捕らわれていたわたしたちの体も、魂も、すべてをご自分のものとして下さったのです。

そうしてわたしたちは、罪の支配から、神の御子イエスさまのご支配に移されました。

それが、わたしたちが「使徒信条」で、「我はその独り子、我らの主イエス・キリストを信ず」と、このイエスさまを「我らの主」、イエスさまが「わたしの主人」とであると、告白する理由なのです。

このことを、今日の『ハイデルベルク信仰問答』の問 34 はこう語っています。

問 34 あなたはなぜこの方を「我らの主」と呼ぶのですか。

答 この方が、金や銀ではなくご自分の尊い血によって、わたしたちを罪と悪魔のすべての力から解放し、また買い取ってくださり、わたしたちの体も魂も、すべてを御自分のものとしてくださったからです。

わたしたちは罪の奴隷でしたが、神の御子イエスさまの命によって買い取られ、イエスさまに所有されるものとなりました。今や、わたしたちの主人は、このイエスさま、ただお一人なのです。

わたしたちが自分の人生の主人を持つということ。それは、窮屈なことだと感じるでしょうか。何かに支配されている。それは、自分の意志がないこと、自由がないこと、縛られること。そのように感じるでしょうか。

この世の他の何かや、あるいは自分が自分の人生を支配するというなら、確かにわたしたちは不自由になり、様々なものや、考えや、価値観に縛られることでしょう。

でも、わたしたちが、神の御子イエスさまを「わたしの主」とするなら、わたしたちはこの方のご支配の許で、まことの自由に生きることが出来るのです。この世の何ものからも、自分自身からも解放されて、まことの自由に、歩むことが出来るのです。

しかし、まことの自由とは、自分が好き勝手にすること、自分の思い通りにすること、自分の喜びのために、何でもしてよいことではありません。

まことの自由とは、わたしたちの主であるイエスさまが示して下さった自由です。

それは、わたしたちを愛するために、わたしたちを救うために、神の身分さえお捨てになることが出来る自由。わたしたちのために、貧しくなり、弱さを身にまとい、まことの人となることさえ出来る自由。わたしたちへの愛のために、何でもすることが出来る自由です。

愛のために、自分に不自由さを強いることさえ出来る。自分の損失や、自分の苦しみさえ恐れなくて、捕らわれないで、愛の業を選び取ることが出来る。

それが、イエスさまがお示し下さった、まことの自由なのです。

まず、イエスさまご自身が、わたしたちのために、まったく神の身分も、天の御栄光も、神の尊厳も打ち捨てられ、低く降り、まことの人となり、わたしたちの罪を担い、罪人として裁かれ、わたしたちのために十字架で死ぬことさえ、受け入れて下さいました。

それはイエスさまが、愛のゆえに、まったくご自由な意志で、父なる神さまに従うことを選ばれ、わたしたちを救うことを選ばれ、喜んで為し遂げて下さったことなのです。

このお方が「わたしの主人」であるということは、わたしたちもまた、このような自由に生きる者になる、ということです。

神の独り子が、わたしを支配して下さい、ご自分の命を懸けて愛して下さい、救って下さり、あらゆる罪の力から救い出し、あらゆる悪の力から守って下さったのです。

罪はもはや、わたしたちを支配していません。わたしたちは、このイエスさまのご支配のもとでこそ、イエスさまのもとでのみ、イエスさまのように愛する者、まことの自由に生きる者として、歩むことができるのです。

<喜ばしい交換>

さて、このように、神の独り子イエスさまのおかげで。この方が、「わたしの主」となって下さるおかげで。わたしたちは、罪から解放され、イエスさまのものとされ、神さまと共に生きる新しい命をいただくことが出来ます。

この救いを信じる者が、教会で洗礼を受けるのです。洗礼は、イエスさまと一つに、分かち難く結ばれているということの、目に見える「しるし」です。

わたしたちは、イエスさまの救いを信じる信仰によって、イエスさまの十字架の死を、自分の罪の贖いの死として受け取ります。また、イエスさまの復活の命を、自分の新しい命として受け取ります。

そうして、神の独り子は、ただイエスさまお一人であるのに、このイエスさまに結ばれたわたしたちもまた、イエスさまと一つにされたことによって、この方と共に、「神の子」と見なしていただくようになるのです。

今日のローマの信徒への手紙の 8:15 に「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」とありました。

「神の子とする霊を受けた」。ここは、厳密に訳せば、「神の養子縁組をする霊を受けた」となります。わたしたちは、神さまと養子縁組を結んでもらったのです。

まことの神の御子は、神の独り子であるイエスさまだけです。

でも、イエスさまは、ご自分の命をわたしたちに与え、被造物であり、罪人であるわたしたちと一つとなって下さり、「神の子」の身分も、御栄光も、復活の命も、そのご自分の恵みのすべてを、わたしたちに惜しみなく与えて下さったのです。

わたしたちが洗礼を受けるとは、イエスさまと一つに結ばれ、イエスさまがもっておられるこれらすべての恵みを、救いを、わたしたちが受け取るということなのです。

宗教改革者であるルターという人物は、信仰は、新婦が新郎とひとつにされるように、わたしたちの魂を、キリストとひとつにする、と言いました。

そして、両者が所有しているもの、幸も不幸もあらゆるものが共有となる。キリストが所有なさるものはわたしたち、信仰ある魂のものとなり、魂が所有するものは、キリストのものとなる、と語ります。

これをルターは「喜ばしい交換」と呼びました。確かに、わたしたちにとっては、キリストが所有なさるものをいただけるのですから、これ以上「喜ばしい」ことはありません。わたしたちは、良いものを受け取るばかりです。

しかし、イエスさまにとってはどうなのでしょう。わたしたちは、イエスさまにいったい何を渡したのでしょうか。それをしっかりと見つめなければなりません。

わたしたちはイエスさまと一つにされて、イエスさまの恵みを、お持ちになっている宝のすべてを、共有させていただくことが出来る。それらを所有して、わたしのものとさせていただくことが出来ます。

しかしその時、代わりにイエスさまは、わたしたちの罪と、死と、悲惨さをご自分のものとされたのです。

イエスさまは、わたしたちの罪をご自分のものとされて、あたかもご自分が罪を犯したかのようにそれを引き受けられました。そして、わたしが罪のために受けるべき、その裁きも、苦しみも、痛みも、罰も、死も、滅びも、すべてをご自分のものとされたのです。

その一方でわたしたちは、イエスさまがなされた罪の償いを、その正しさを、神さまの御子であるその聖さを、すべて自分のものにして良い、と言われたのです

わたしたちは普通、誰かと何かを交換するならば、同じ価値があるものを交換します。

しかし、イエスさまとわたしたちの間で、わたしたちの方には、差し出せるものは何もありませんでした。恵みをいただくために、救いをいただくために、交換できるものは何も持

っていなかったのです。

むしろ、わたしたちは、負債を抱えていました。与えるどころか、相手に損をさせ、苦しめ、破滅させるような重荷しか持っていませんでした。それを、いったい誰が、自分の良いものと交換したがるでしょうか。

しかし、イエスさまは、それを喜んで交換して下さったのです。わたしたちに対する、まったく自由な愛によって、イエスさまは、喜んでわたしたちの重荷を負い、わたしたちの罪をご自分の罪のようにしてその身に負い、十字架の死に向かわれたのです。

そして、わたしたちにはただ、救いを与えて下さった。罪の赦しと、神の子の身分と、新しい命を与えて下さった。イエスさまは、わたしたちがそれをただ受け取り、感謝と喜びにあふれて生きることを、ご自分の喜びとして下さったのです。

わたしたちが救われ、神さまと共に生きる者となることこそ。神の子として、神さまとの親しい交わりの内に生きることこそ。神さまの喜び、イエスさまの喜びであると、言って下さるのです。

わたしたちが「神の子」と呼ばれる、その恵みは、このような神の独り子、我らの主、イエス・キリストによって与えられたものです。このようなお方が、わたしたちの救い主なのです。このようなお方が、わたしの主なのです。

わたしたちが「神の子」とされていること。天の神を「父よ」と呼ぶことができること。まことの愛と自由に生きる者とされていること。この恵みを、心から信じ、また喜び、感謝したいのです。

わたしたちは、神の子と呼ばれるようになってもお、自由をはき違え、愛に生きられず、罪を繰り返しているかも知れません。しかし、わたしたちはイエスさまのものとされており、すべての恵みが注がれているのです。

この方のご支配のもとで、この方からいただいたすべての恵みの賜物によって、わたしたちも、まことの自由に生きる者、まことに愛する者として、歩んでいきたいと願います。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの愛する独り子イエスさまを、わたしたちのために遣わして下さり感謝いたします。

イエスさまは、わたしたちへの愛のゆえに、すべてをお捨てになり、あらゆる苦しみを引き受けて下さり、ついには十字架の死によって、わたしたちを支配する罪と死と悪を打ち破り、わたしたちの主となって下さいました。

わたしたちはただ、イエスさまのおかげで、ただ恵みによって、死ぬ者から生きる者とされ、罪人から神の子とされ、悲惨な者から最も幸いな者とされました。

どうかこの与えられた豊かな恵みに、自由な愛をもってお応えすることが出来ますように。

日々の歩みの中で、ただイエスさまだけを主と仰ぎ、あらゆる支配から解放されて、自由な決断をもって、神さまを愛し、隣人を愛する歩みが出来ますように。

わたしたちの主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 26 「われらの主こそは」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン